

トロント滞在記

山口 博司

一九九〇年四月より一年間、在外研究のため、カナダのトロントに滞在した。その時の様子、またトロント事情など、家族の体験を混えながら書き綴って見たいと思う。

私自身、以前、英国で約六年間研究生活を過した経験があり、家内もそのうちの数年間は私と生活を共にした。従って、今回、我々夫婦にとっては二度目の海外生活ということになる。しかし所変われば環境や事情も違ってくる。まして、今回は九歳と七歳の子供を伴っての生活である。

(一)

トロントに到着後しばらくの間は家族共々、時差ボケでひどいものであった。それにひどく寒い。外には四月と云えど、まだ白いものが舞っている。日本の春から冬にまた逆戻りである。とり合えず少ない冬物を着せ、眠たがる子供たちを地元の小学校に連れて行ったのが我々、トロントでの生活の始まりであった。

ランプトン・キングスウェイ小学校、周

りが木々に囲まれた全校生徒四五百名の学校で、都会の小学校にしては、良い環境にある。「リスが在る」、子供たちの第一声であった。子供たちにとって初めて体験する外国の学校生活である。さらに、英語はまったく理解できない。しばらくの間、母親同伴の通学となった。しかし、すぐに親の同伴は必要なしと言うことなのである。子供の環境への順応性を阻害するのはむしろ、不必要な親の保護習性にある、と言うことであろう。こうして、ともかく、子供たちは親の心配をしり目に学校に通い出した。

トロントが位置するオンタリオ州の義務教育期間は、六歳から一六歳まで、日本の学校制度とはかなり異なり複雑である。大別すると、日本の小学校に当たるエレメンタリー・スクール、中学校に当たるジュニア・ハイスクール又はシニア・パブリックスクール、また高等学校に当たるセコンダリー・スクール、その他高等専門学校に当たるハイスクール(レベルⅠ・Ⅱ・Ⅲ)がある。しかし、かならずしも日本のように同年齢の子女だけが同学年に在籍するとい



小学校の教室にて

うことはなく、学業成績により、違った学年に留まることもしばしばある様である。移民社会において、自由と平等を尊ぶ国民意識の中に、厳しい現実と競争原理の働く国、これらの事情が学校教育の中にも現われている。たとえば、私たちの子供が通う小学校では、教室のあちらこちらに島のようにして机が配置されている。その中で生徒がむしろ思い思いの勉強を各人で独立

して行っている。教育内容は担当教師に任せられ、特に低学年では決まった教科書などはないようである。当然、授業としては、系統的に行われるのに違いないが、先生はちょうどオーケストラの指揮者の様に見うけられる。自由により自己を表現しながら、各個人の能力および独創性を伸ばすための環境である。ただ、すこし教室全体が雑然とし過ぎているように感じる（特に低学生では）のは私の偏見かもしれない。

教室のあちらこちらに私たちの子供の様に、明らかに国外から来たばかりと思われる生徒が、何かぎこちなそうにしている。聞く所によると、市中のある学校では生徒の過半数がそういう生徒で占められているクラスもあるそうで、先生のご苦労も察せられる。

(二)

七月にもなると、急にトロントに夏がやってくる。キャンパスの木々が一斉に芽を吹き、二週間もすると蒼々と木々が茂り出す。キャンパスに学生の姿がまばらにな



オンタリオブレースでのピクニック

るころ、野外レジャーシーズンの始まりである。短い夏を思い切りのしもうと人々は、一斉に外に出る。

トロント市は、オンタリオ湖に面した都市である。市の中心街に林立するビル谷間を南へ抜けるとすぐに湖岸に出る。湖畔にはオンタリオブレースと呼ばれる市民の憩いの場所があり、湖畔に浮ぶ三つの島全体が公園になっていて、レジャー施設、劇

場、ヨットハーバー等が並んでいる。夏のピーク時には入場ゲート付近は混雑しているものの、いざ内に入ってみると意外にゆったりとしているのに驚かされる。夏にはいろいろな催しが多数あり、イベントごとに出かけるのもたいへんなほどである。しかし、キーイベントともなると、ホスト教授、研究室の人々さらに近所の住人からも、ぜひという声がかかりしばしばひんぱんに出かけた。人の集まる所、いろいろな人種と出合うのもカナダ特有のものである。およそ世界中からと言っても過言ではないほど多くの人々が集っている。それらの人々と氣が合ふに話しが出来るのもおもしろいものである。一見物見高い観光客風の私たちでさえ、よく場所、道を尋ねられるのにも驚かされた。トロントに居ながら世界中の文化風習に接することが出来るのも、国際都市トロントならではの経験である。

トロントから車で約二時間、エリー湖とオンタリオ湖の間に、ナイアガラ瀑布がある。五十メートルの高さから落ちる毎分一億リットルを超える水がゴーと音を立て



ナイアガラ瀑布

ている。地面から響く轟音、滝つぼから立ち昇る水しぶき、始めは言葉を失い、やがて意識も一瞬空白となる。ある日本人の知人が、「ナイアガラ瀑布を見ると、何か人生観が変わるような氣がする。」と、言われていたことが印象に残った。なるほど、これほどの大自然の驚異に接すると狭い見方は通用しない。水しぶきを浴びながら、しばし考えさせられた。ナイアガラは滝か

ら下流、かつて滝が年々後退を続けて来た跡が現在切り立った峡谷になっている。その峡谷をナイアガラ川が流れている。そして、その川が大きく蛇行する所があり高所より水面を見下ろすことができる。大小の渦が規則正しく発生、消滅を繰り返している。巨大な流体実験を見ている感にとらわれる。かつて、流体力学の著名な先生が、ここに来られた折、この場所をしばらく動かず水面を観察されておられたとか。ホスト教授より伺ったお話しを思い出しながら、しばし水面の流動に見入った。

キャンパスに学生が戻り、子供たちが再び小学校に通い出す頃、カナダ北部より紅葉の便りが聞え出す。カナダの自然、北アメリカの自然に触れようと、渡加前に意を決した私たちは、さっそく紅葉前線に向って車を飛ばした。何につけてもあらゆる物が大作りにできている。スーパーハイウェイと呼ばれる片側六車線の道を車で北上する。かなりスピードが出ているはずであるが、まったくスピード感がない。周りの景色への視線が遠すぎるのであろう。やがて、ヒューロン湖東岸のジョージアンベイ地方



トロント大学キャンパスにて

に入る。紅葉の名所と言っても、いけどもいけども紅葉した森又森、真に紅葉づくしとでもいったところであろうか。カナダの紅葉をたとえれば、ブラシで描いた画であるのに対し、日本の紅葉はさしづめ点描とでもいった感じがする。ソ連でもこのような広大な紅葉に出合ったことがある。細部に至る美しさの点では日本の紅葉に優るものはない、しかしやはりそのスケールの雄

大さには目を見張る。

(三)

カナダは人種のモザイクの国と言われ、多くの人種さらに民族がそれぞれの文化・伝統を伝承しながら、カナダ国民としてのアイデンティティを持つと言われている。こうして見ると、トロントは何かにつけ英国的である。また、ケベック、モントリオールなどはフランス的である。英語とフランス語の両方を公用語とする国、カナダ、英国系とフランス系との感情のぶつかり合い、トロント滞在中、常にそのちぐはぐな、ともすれば微妙に反発し合う感情を感じていた。しかし、いざ国どおしの問題、さらに国際的な問題となるとやはりカナダは一つという事になる。我々の滞在中、中東で湾岸戦争が勃発した。この様な事態に對しては比較的スムーズにカナダとしての意志の統一が行われる。しかし、国内政策になると州差、地域差が激しい。全国的に調和のとれた発展をめざす連邦政府と、地域の利益を優先する州政府との対立は、政

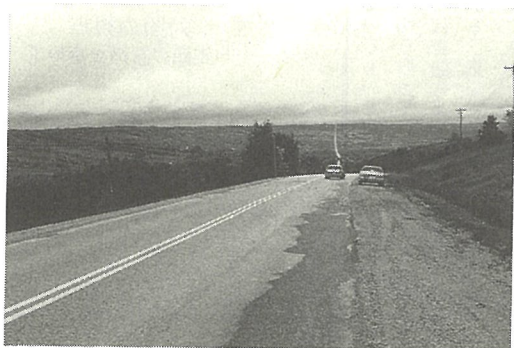
治、経済機構の各州別の隔りをも考慮すると、とりわけ難しいように思われる。中でも、ケベック州の憲法承認をめぐる問題（ケベック問題）は我々の滞在中にも、非常に議論がなされた。しかし、結局、問題を解決する事も出来ず先送りの状態になった事も、この国の政策運営の難しさを窺わさせる。また、原住民（カナディアン・インディアン）の地域紛争も混迷の度を極め、これらの問題をさらに複雑化させている状況にあると言えよう。しかし何と言っても、全世界の陸地の六・七％を占める広大な国家である。豊富な天然資源に支えられた安定したカナダ経済・工業の発展から見れば、この国の将来へ向けての期待は非常に大きい。

ある日、日本領事館主催の年次行事に招かれたことがある。その時、日本より民族学の研究で来られている先生にお会いした。日系移民の研究とかで、お伺いするところによると、現在日系移民は第四世代に達するという。都市部に住むこれらの方々の現地への同化は早く、近世代では日本語も徐徐に失われつつあるようで、日系文化

会館などが中心になり、日本文化の継承と存続に尽されている様である。逆に、地方の日系移民社会では、現在の日本より、より日本的とも言える伝統、風習がそのまま残っている所がある様である。意外ではあるが、たいへん興味深い。カナダにおける特徴的な一面であると考えられる。

(四)

秋も去り、冬が来た。カナダの冬はとりわけ厳しい。時には外気温がマイナス二〇度にもなることがある。外に出ると吸い込む空気が、鼻に痛く感じる。それでも、子供たちは、毎日歩いて学校に通った。たくましいものである。その頃になるとすっかりカナダの生活にも慣れ、地元の子供たちにも溶け込むことが出来る様になった。毎週、週末ともなると子供たちの友達が家に泊りに来る。母親はその準備に大わらわの日々が続いた。たのしそうである。意志の通じ合える喜びと、初めて知る異国の文化、心の中に広がる世界は測り知れぬものがあるに違いない。カナダでの生活は、私自身



地平線に消える道と紅葉

の留学のみならず、家族の留学体験でもあった。

帰国の早朝、やはり空から白いものがちらりちらりと舞い降りていた。トロントでお会いした人々の暖かい心づかいと、ご支援にもう一度感謝し、想い出深いトロントの街を後に、帰国の途についた。

(大学工学部助教授)

同志社談叢 第十一号

論文

同志社基督教演説会……

本井康博

——一八八一年のキリスト教と仏教——

マツキーン『若い日の新島襄』……

北垣宗治

Missionary Herald に最初に載った

新島襄の追悼文……

井上勝也

新島襄の大学設立運動(二)……

河野仁昭

明治期の岩手県における同志社人たち

高橋光夫

ブラジルで活躍した小林美登利

五十嵐勇作

小塩高恒小論——その生涯と思想——

室田保夫

横山松三郎再致……

桑嶋洋一

資料

新島襄に関する文献ノート(その九)河野仁昭

山本覚馬・新島八重文献目録……河野仁昭

(頒価一、〇〇〇円・送料一六〇円)

発行・同志社社史資料室

取扱い・同志社収益事業課

電話(〇七五)一二五一—三〇三七・八